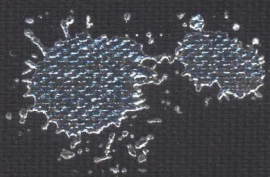


未青年



井上光晴 長篇小説 全三巻 12

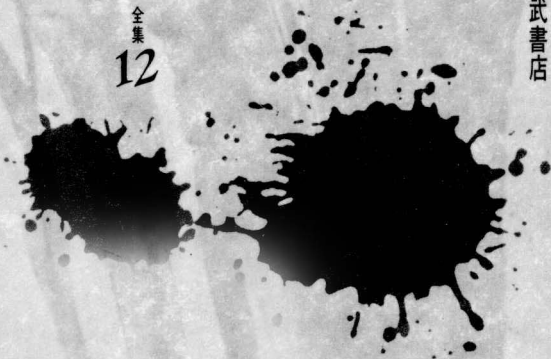
福武書店

井上光晴 長篇小説

全集

12

未青年



定価 二八〇〇円

井上光晴長篇小説全集12

未青年

一九八四年一月二五日第一刷印刷

一九八四年一月三〇日第一刷発行

著者 井上光晴

発行者 福武哲彦

発行所 徳福武書店

〒一〇二 東京都千代田区九段南二二二二八

電話 〇三三三〇一二三三

振替口座 東京六一〇五〇九七

印刷・製本 図書印刷

1984 © Minoue

ジャーナル・エ ISBN 4-8288-2039-6

ISBN4-8288-2039-6 C0083

落・虫・本は取り替え致しませ

井上光晴長篇小説全集12 目次

未青年 5

解説 富岡幸一郎 295

装画 P・アレシンスキー  
装丁 菊地信義

# 未青年



誰もがそのねずみ色の毛深い鱧を見ると、思わず口を開くのだ。毛深いというより、何かしらそういういい方がびったりする程、一メートル足らずの鱧は全身に赤茶けた斑点を浮きだしており、下腹部一带に奇妙な髭に似た細いじくさぐの線を走らせていた。むきだした歯には薄らと血が滲み、鰭の付根の辺りは時折深呼吸でもするように収縮した。

「生きとるんだよ、こいつはまだ……」

「犬みたいな顔しとるな」

「犬。犬だ……」目立って短いゴム長を履いた男が、段をづけるような口調で反撥した。「犬の顔に見えるんかね、これが」

「犬といっちゃいかんかな」血色のわるい若い男は気弱そうな声をだした。「鱧というような気色にならんしね、どうも……」

「死んじゃおらんよ。海にでもつけると、さあつと泳ぎだすんじゃないか、生きとるんだよ、といった男が同じことを繰返した。

「こんな鱧、見たことないな」片方に黒い耳あてをした男がいった。「ぶちみたいないな色しとるし、犬といわれても仕方ななぞ、

こりゃ」

「いくら毛色が変わつとるというても、犬とは見えんやろう。犬の顔に似とるんならそれはもう鱧とはいえんからねえ」短いゴム長の男は妙な理屈をつけた。

「一丁泳がしてみるか。案外はあつと泳ぐかもしれんぞ」

「やめとけよ、勿体ない。これでも工場に持って行けば二百円にはなる」

「工場。今頃何処の工場に持って行く。寝ほけとるのと違うか」

それらのやりとりを好摩英次は人垣の背後できいていた。泥砂の混合する渦に横たわっている鱧の全体をまだはつきり目にしてはいなかったが、そのためにかえって死にかけている生物の不気味さを想像できるような気分と、肩の間に首を突込む余裕のないまま、彼はそこにじっと立ちつくしていたのだ。それまでの口調と異なる声があらわれたのはその時である。それは彼の耳許でした。

「その鱧、僕に譲ってくれませんか。二百円が相場らしいけど、三百円位でどうですか」

人びとは声の方を振向き、訝しげな視線の半ば以上を好摩英次にあびせた。今の言葉を彼の口からでたのだと錯覚したので。

「別にどうってわけじゃない。生きてるかどうか試してみようっていうんです。さっきそんな話がでていたでしょう。……海に放つてみるんですよ。自分の力で潜るかどうか。なかなかの実験だと思えますがね」

漁師たちはまるつきり反応せず、何処かの廻し者かいかさまな



山師でも窺うような表情を露骨に示した。

「賭けたっていいですよ。そいつに泳ぐ力がまだ残っているかどうか。どうです、やりませんか。……僕はどっちに賭けたっていいんだ。あんた方が泳ぐ方ならお陀仏でもいいし、反対なら、すいすいと潜る方に賭ける。おもしろいギャンブルだと思うけどな」

短いゴム長を履いた男が、ぎこちない足どりでやっと前に一歩でた。

「あんたらは仲間かね」

幾分丸味をおびた印象の体を開くようにして、男は好摩英次を見ると、大仰な仕種で首を振った。

「あなたは何しとる、そこで、何か用事でもあつてきたとかね」

「通りすがりの者ですよ」好摩英次はいった。「向こうの道を通つていたんです。そしたらみなさんが見えたんで……」

「下りてきたわけか」鱧の生死に賭けることを提案した男が補足した。

「それでも道路を、バスにも乗らずに……」ゴム長の男はいいかけた言葉を途中で折った。「まあ何処をどう歩いて行こうとあんたの勝手やけどね」

好摩英次は何かいおうとした。しかし答える間もなくもうひとりの男が漂う気配など歯牙にもかけぬといったふうに、折目のついたズボンから五千円札を一枚取出した。

「わかり易くいきますか。鱧を五百円で僕が買う、そんならいいでしょう。すると、残りには四千五百円。これが賭け金だ。あんた

方、賭けるひとはいいいかな。今もいったように、どっちに賭けたっていいんだ。生きてるといふのならおれは死んだ方。死んだというなら、潜る方でいいですよ」

「生きとるのは生きとるさ。腹はまだびくびく動いとるとやからね」

「そうそう、僕のいい方はちょっと正確じゃないな」五千円札を握る男はいった。「生き死にじゃない。泳ぎだすかどうかで賭けましよう。潜つて見えなくなつてもいい、要するに生返つて元の鱧になるかどうか。それならばつきりするわけだ」

「もし、このまま泳ぎも潜りもせんなら、あんたはその金を投げだすというんか」死んじやおらんよ、といいつづけていた男が口をだした。

「どっちに賭けてもいいんだ。僕はあんた方の反対に廻るだけだから」

「よし賭けた。こいつはもう潜らんよ。おれは決めた、そつちに海につけたら泳ぎだすかもしれんという男が言葉を重ねた。

「じゃ行きますか、それで」

「ちょっと待て」ゴム長を履いた男が制した。「そんな馬鹿げたな賭けをやらかそうというのかね」

……一体あんたは何の目的で、五千円札なんか振廻して、出鱈目な賭けが気に入ったんですよ。……鱧はきつと潜る。僕はただそう考えてるだけです」男はこともなげに応じた。「もし力がつきているのならそれでもかまわない。どうですか、この面構えは。ふてくされたなんでものじゃない。……だから、僕はこの鱧

のために一票入れてやるうっていうんです」

「おもしろいじゃないか。おれは死んだ方に、泳ぎも潜りもせん方に賭けるぞ。それでいいんだな」

「まあ待たんか」短いゴム長を履いた男はいった。「あなた、ほんとに饜のことだけでそういうんか。ほかに何か、隠しごとでも持つとるんじゃないやなからうね」

男がにっこり笑うのを好摩英次は見た。子供じみた邪心のない表情に釣込まれるように、血色のわるい男が「おれも乗るぞ」といった。

「いくら犬みたいな顔しとつても、こいつはくたばつてしもうとるさ。潜つたりすることはまずなかよ」

「乗つてもいいな、おれも」別の男が呟く。

ゴム長の男は眉間に皺を寄せていた。しかし、それは今にも解けるだろう、と好摩英次は思った。

「賭け金の割りふりがむずかしいな」

「こうしたらどうですか」ギャンブル提案者の声は以前にも増して明るくおどった。「ひとりひとりに四千五百円ずつも取られちゃかたないませんか。これだけがこっちの賭け金だ。それで僕が負ければ、この金をあなたの方に渡して、まあ一杯今夜の飲み料にでもして貰う。その代りこっちが勝てば、あなた方みんなから集めた四千五百円頂戴する。どうですか、これで」

「五千円と違うんか」

「いやいや」男は待つていたかのように説明した。「それをはつきりしとく必要があるんだな。……饜は五百円で買ったのだから、

勝つても負けても僕のもんです。むろん、潜つてしまえばどつちにしるばあですがね」

「そいじゃあなたは、潜る方に賭けるんだね」ゴム長の男はいった。

「僕はどつちでもいいですよ。しかし、なるべくなら潜る方にしたいな。とにかくこの饜の面構えが気に入ったんだから、反対側には廻りたくないんだ」

「それで決まった」

饜の面構え、などと見えすいた理屈をつけて、男はなぜ負ける方に廻るのか。漁師たちもそれを察しながら乗っており、一旦疑惑を口にしたゴム長の男も、今は逡巡もなく、思いがけず舞込んできた飲み料にあずかるうとしている。好摩英次の視界に入った若い漁師がわざとらしく顔をそむけた。一枚加わるつもりでもそれはいかんぞ、というふうには。

「僕は見物人だから……」彼はいった。「そうだ、僕が審判をやるう」

饜を買つた男は心持ち嫌な顔をしたが、すぐ屈託のない表情に戻つた。

「それはありがたいな。正式の審判をつけて貰えば、饜の方だつて力のだし甲斐があるというもんだ」

好摩英次をまじえて八人の男たちは、夫々が傍にいる人間の歩調を気にするような足どりで、引寄せる波の方へ歩いて行つた。

当然そうしなければならぬような手つきで、いいだした男は尾鰭の辺りをつかみ、誰の手助けも受けぬままそれを引きずつてい

たが、生返って海に潜る方に賭けた者としては、ひどく割の合わない仕方であった。なぜなら、浜までの距離を引きずられた分だけ、鱧の内包するエネルギーも消耗するはずだからである。しかし男は意にも留めぬふうくに振舞、好摩英次はふふんと思った。

五島列島を越えて東支那海から吹いてくる梅雨明けの季節風には、何処かにじっとりしたものが降り、一向にさっぱりしないが、変わり目の激しい天候の下で、海面もまたすでに朝の容色を失っていた。

勝つと決まっている賭けを遂行することにある種の後ろめたさでも感じるのか、漁師たちの口数はだんだんと減って行き、やがてまったくかわされなくなってしまう。そして都合よく、何処か欠けた響きをうねらせながら、一隻の小型漁船が突堤の先端を横切ったのだ。

「小竜丸か」

「だとすると、今日辺りかな。あれは産婆を迎えに行く船やろう」

「そうじゃなからう。本人が乗っとるぞ」

好摩英次は鱧の方に近寄り、するともなく指先で胴体の斑点を小突いてみた。意外にぶよっとした手応えが返る。しかし尾鰭の根元を握った男は見向きもせず、漁船へ移った関心が戻るのを待っていた。

鳥居の立つ小さな岬を指差すような形の細い突堤の途中にゴムホースのようなものが垂下がり、大人か子供か見境のつかぬ人影が、それをたくし上げている。一斉に飛立つ小鳥はきつと雀なの

だらう。この辺の鴉は場所を変える時、妙に気がねするような羽ばたきで舞う。

「本番行きますよ、それじゃ……。さあこの狼ざめが果たして海に深く潜航するかどうか、頼みますせ」

男はわざとらしく語尾を弾ませると、鱧をぐるりと一回転させながら、鵜の割目から海に向かって扇状にあふれる濁った波につけた。放たれた鱧はしばらく半身の恰好で海面を漂い、かといって死に絶えたとも見えぬふうくに、時折身願いした。

「精の強い鱧やな」

「ひょっとするとひょっとするぞ。このさめ、息を吹返すかもしれん」

思わずそういう声があがり、短いゴム長を履いた男は、結局自分も一枚上乗せしたくせに、それみたことかというふうに口許を歪めた。賭けに負けても自分の責任ではないといわんばかりに。

五分か七分か、漁師たちにとってははらはらするような時間が過ぎた。そのあいだに鱧は口からひと筋の泡を吹きだし、苦しげに身もだえしながら一旦線状の鬚に被われた下腹部を波間で浮沈みさせたかと思うと、ふたたび半身の状態に戻ったのだ。考えようによつては生気を甦らす過程とも見え、反対に断末魔の症状とも受取られた。

男はまばたきをすると、好摩英次が思った通りのことを口にした。

「これは負けだな、僕の。……」

「それでも」という声は血色のわるい青年のものであった。

「いや、完全な敗北ですよ。このままじゃどうにも仕様がな  
とにかく鱧はダウンしてるんだから。どっちみちタオルという  
ころだな。……どうですか、レフリーの判定は」

「タオルを投げられちゃ仕様がな」好摩英次はいった。「TK  
Oだと判定しますよ」

途端に男は靴を脱ぎ、ズボンをまくり上げると膝許まで潮に浸  
りながら、波間に体を浮かしている鱧の尾鰭をつかんで渦に放り  
投げた。

「鱧君、随分頑張ったが、刀折れ矢尽きたな」

「それじゃ、おれ達が勝ったんか」

「TKOだというレフリーの判定だからやむを得ない」

男はそういうと、ズボンの裾を下ろし、ちり紙で足裏を丁寧に  
拭いてから靴を履いた。そこに至る一連の動作はかなり悠長なも  
のに見え、好摩英次はもって廻ったような作爲を感じた。

ギャンブル提案者が五千円札をふたたびズボンのポケットから  
取出した時、漁師たちは誰もそれから目をそらした。

「惜しいことをした」男は舌打ちでもするような口振りだった。

「どうせ死ぬなら海の底まで潜ってくればよかつたんだ」

好摩英次の歩いてきた道路を逆方向に、二台のバスが通り過  
ぎ、その後をまた荷台をふくらませた小型のトラックが走り去っ  
た。湿った空気の中だというのに、どんな作用のためか、道路一

杯に油煙が充満し、それが消えるともう一度薄い天幕のような白  
い埃が蜜柑畑一带を被った。

未 結局、五千円札は、短いゴム長を履いた漁師が受取ることにな

った。鱧を買った男は、何やら打解けた態度で誰彼となく相手に  
語り合い、あげくには陸に打上げられた鱧の真似までしてみせ  
た。

「甘い生活」という映画、見たことがありますか。大分前の代  
物ですがね」

「見ましたよ」好摩英次は応じた。明らかに自分に向かってきた  
声に。

「僕は間違った解釈をしていました。あの映画についてですよ。

……海岸に大きな鱧が打上げられていて、それを主人公の青年が  
見ている場面があったでしょう。ラストに近いシーンです。そこ  
に女性があらわれるが、男はすでに忘れてしまっている。……ど  
ういうのかな、僕は長い間錯覚していて、主人公と女性は以前に  
深い関係があったと思ひ込んでいたんですね。しかも青年はそれ  
を見忘れてしまう。甘い生活にただれ切ったラストシーンとして  
はその方がびつたりくる。ところが実際の映画はそうじゃないん  
だ。最近リバイバルがあって、それを見たんだけど、青年と女は  
単なる知合いというか、青年が忘れてしまってもいいような、そ  
ういう間柄にしか過ぎなかったんですね。女性の方は青年に好意  
を持っていたので、忘れられなかったというわけです。何のこ  
とはない、僕は自分勝手にストーリーリイを作り変えていた。……」

そこまで話すと、男は光のない空を眩しそうに見上げた。一体  
何を仕事にしているのか、コールドでしつらえた上衣と、昨日デ  
パートで買ったような新品のズボンは色も組合わせもまるで釣合  
っておらず、年齢さえも三十代半ばか、或はずっと若いのか見当

つかない風体だった。

「その鱧、どうするんですか」好摩英次はきいてみた。推測通りだとすれば、自分よりひと廻りは年下だと思われる正体不明の男を、少しばかりゆさぶってみようと思ったのだ。

「鱧。ああこれね。三光精油に持って行くつもりですよ」

「あなた、三光精油のものか」

短いゴム長を履いた男がきつとした顔を向けていうと、漁師たちの表情は変わった。

「冗談じゃない」男はいった。「僕はこれを三光精油に持って行って、買取らせようというんだ。こんな海で生きてるのが鱧になつて、鱧だつて自殺したのかもしれないね」

「しかし、あなた……」

若い男がいかけて止めたのを、黒い耳あてをした男が引継いだ。

「何をきいとるのか知らんが、三光精油に持込んでも一文にもならんよ。補償問題はもう済んでしもうとるんやからね」

「補償契約の期間が切れたことは知ってますよ」男はこともなげにいった。「でも問題が解決したわけじゃない。その証拠にあなた方だつて海にも出ていないじゃないですか。契約が切れたのならまた新しいのを作ればいいんだ。違いますか」

漁師たちは顔を見合せて、互いに薄らとした笑いを浮かべた。事情を知らずに御託を並べやがるという気持を露骨にみせながら。

「まあ、その鱧、三光精油に持って行ってみることにだね」

ゴム長を履いた男がそういうと、皆は口にしたして笑った。

「行きますよ。いくらだすかしらんが、五百円で買ったんだからそれ位にはなるはずですよ」

「バス代使つて、そいつをわざわざ運ぼうというんか」黒い耳あてをした男がいった。

「漁獲高に対して補償するという契約期間は確かに切れた。しかしそれで終りというわけにもいかんでしょう。僕はそう思うな」

「あなたがいくらそう思うても、片はもうみんなついてしもうとるんだ」ゴム長の男はいった。「第一、あなたはこの辺の者じゃなからう。船も道具も持つとらん者に、いくら鱧を持って行つたからといって、工場が何で金を払うものか」

「食う方の側としていえるんじゃないですか」男はまた眩しそうにまばたきした。「こんな鱧、釣上げたとしても食べる者はおらんでしょう。だからそれをいいに行くんですよ」

「この辺の魚が売物にならんのはわかつとるさ」耳あてをした男がいった。「それで補償して貰うんやからね。それをあんた、こと新しくういたてるのは何か別の見があるとやろう。こんな気違い鱧に五百円もだして、どうもはなからおかしいと思うちゃおつたんだ」

「まいったなあ。そんなんじゃないだけだな」男は頭をごしごとと掻き、そういう仕種までも好摩英次にはひとつひとつ計算されたものに感じられた。

「どうも、五千円いかれたんで、かつかしてるのかもしれないね」

漁師たちの緊張は解け、耳あてをした男はそんな言葉を引き出した効果に満足したようにいった。

「自分でいうとるんだからね、このひと……」

「それでも、あんた方にはわるいけど、かっかついでにこの鱧、矢張り三光精油に運びますよ」

「あんなことまだいうとるんだから」

「気のすむごとやってみたらよかよ、そんな大鱧目の前にぶら下げられて、工場のガードマンたちがどんな顔するかね」

「鱧と一緒に、海に叩き込まれんようにすることだね」

「こりゃ見物ものだ」

漁師たちの口々にいう中を、男は実際に鱧の尾鱧をしっかりとつかみ、最早引摺りもせず、それをぶらぶら下げながら、言葉通りに道路に向かって歩きだした。

## 1

連絡船松前丸は函館を出港する前から強風波浪注意報下の警戒態勢におかれており、甲板に通ずるドアというドアは固く閉じられていた。船体の動揺に襲われぬうちに、船酔いを予期する乗客たちは早くもぐったりとそれぞれの場所に体を横たえ、嬰兒の泣き声をあやす若い母親の口調だけがいやに甲高くきこえるのだった。

今のところ船は不気味な位静かに、滑らかな速度で走っていた。丸窓の硝子を通してひろがる鉛色の海面は、暗いちぎれた綿布のようなものに被われ、ゆっくりと左右に傾きながら、間をおいてかすかな笛に似た響きを伝えたが、むろんそれは空と波頭をかすめる風の音に違いないのだ。

通路を挟んで十畳間程に仕切られた客室の荷物棚を背にして、鯨崎<sup>くじまき</sup>矩生は身動きもせず臉を閉じていたが、靴音がきこえるたびに血走った視神経と闘わねばならなかった。この三日間、満足に眠っておらず、牛乳やパンを食べるたびに吐きつづけた。

「あかん、食堂も閉鎖されてるわ」

「四時間も、間もてへんな、これ」

絡みあう声の背後に、船員と連立った男が見え、彼は反射的に両腕をのばして、大きなあくびをした。

私服かもしれぬ男が去ると、船体に最初のきしみがきた。揺れというより、締めつけられるような振動が客室の床を走り、消える間もなくたてつづけのきしみに捉われた。

「仕様もない揺れ方しよるな」

「あかんよ、これ。将棋どころじゃおまへんぜ」

船体を叩く波浪の響きにゆすられるたびに、人々は声をあげたが、鍛崎矩生の気分にかえって落着きが生まれた。少なくとも悲鳴と呻きがきこえている間、恐れているものは迫ってこないだらう。

彼は体をずらして一旦俯せになり、それから向きを変えて本気で眠ろうとした。緊張した臉はすでに限界に達していたし、胃液だけの苦い胃袋に、ジュースでもうどんでもとにかく栄養を与えなければどうしようもない。

しかし、睡魔を呼寄せることは矢張りできなかった。津軽海峡をまずこえられねえな、大抵連絡船でばくられるんだ。誰かにきいたか読んだ文句が絶えず耳奥を離れず、溝に吐いた牛乳の青白く濁った色が、拭っても拭っても頭の何処かにこびりついているのだった。

朝とも日暮れとも見分けのつかぬ函館の埠頭に潜伏していた三日間、不思議にそれ以前の時間はぼっかりと断ち切られていて、熱っぽくちかちかする臉の内側には、どういいうわけか必ず、岸壁につながれたたるま船の石油ストーブが映った。

むろんそのストーブに火が入っていなかった。船先の下を居住区にした三角形の部屋には、汚れた空の食器棚のほか、これとい

う家財道具もなく、埃だらけの敷布と醬油の四合瓶が転がっているだけであった。彼はそこにまる二晩隠れていたのだが、その間中、まだ充分使える石油ストーブをなぜ置き去りにしたのか、とそればかりを考えていた。

ひと晩も次の夜も、ごく近くでかわされる話し声があった。

そう考えると同じ口調とも思え、また全然違うアクセントともきこえたが、意味不明のまま切れ切れに漂う言葉もまた彼の脳髓を去らないのだ。

船体はまた縦揺れにきしみ、階段に近い場所にあぐらを組む男たちが、大仰に悲鳴を上げた。

最初の夜、中学校の便所に潜みながら、彼はふっとたるま船のことを念頭においた。二年か三年前の冬、棧橋の代用にされていたそのたるま船の船先に立っている潜望鏡のような恰好の煙突を見ていたのだった。それから吐きだされる淡い煙は折からの粉雪にあおられて、湾口をへだてて立並ぶ海岸倉庫を背景に、何かしらひとひらずつの薄青い花でも咲かせるように、宙に浮いた。

そして彼が覗くと、そこにひとりの男が坐っていて、片手を額にかざしながらにんまりとした。その時、言葉をかわしたかどうかはつきりしないが、中学校の便所では、男の髭もじゃの首に巻きつけられた古ぼけた毛糸のマフラーを思いだしながら、助かったとさえ内心叫んだのだ。

中学校の便所は斜め上方の隙間から街灯の明りがぼんやりと見え、テレビかラジオのかすかな音楽と、自動車のブレーキ音までが入りまじって伝わってきた。それからまた艇船はしねのくるっくるっ

という、あまり順調ではないエンジンの響きもきこえた。

殺害した父親の顔、というよりそれを見た瞬間、両腕を膝にあてて蹲った母親房江のざんばらになった髪の毛を、その時はじめてわれに返ったかのごとく思い浮かべながら、彼は奇妙な気がした。なぜあんまり恐くも辛くもないのか。

それっきり、鍛崎矩生は死んだ父親のことは考えていない。新聞もみたくなかったし、生残った者たちを考えるのはなおさら嫌だった。七月だというのに、だるま船の深夜はひんやりした大気が侵入し、一種焦臭さのこもる海の匂いと重なって、余計に湿った暗さを感じた。

明け方近くになると、火の気のない部屋は一層じめじめし、上部の蓋を開け放った方がかえって暖かくなった。先住者から置去りにされた石油ストーブにこびりついた油ともごみともつかぬ黒いシミが次第にはっきりと眼に映ってくる、その上げ蓋も閉めねばならず、彼は手足をばたばたさせてしのび寄る寒さを防いだ。

だるま船での二晩目がまさに終ろうとする未明、比較的に近い方角で、犬の啼声があるのをきいた。さらにまたそれより遠い場所では別の犬が吠えた。すると、しばらくして高低のついた救急車の警笛が坂道を上って行ったのだ。

彼がまだ小松藩吉しんまに対して自分の家族だけの父親だと信じていた時分、その口を通じて語られた撫順炭鉱の話の中に、ハーモニカを吹くと絶入るばかりに啼きだす犬がでてきた。

未とすると、それっきり父親のことを考えていない、というのは

嘘になるのか。鍛崎矩生は、警笛の余韻をききながら、撫順炭鉱の話をつらから引きだしたのを改めて反芻した。

船体のきしみはようやく激しくなり、便所に立とうとした乗客のひとりはいくらも歩まぬうちに口を押さえながらしがみ込んでしまった。

平林という憲兵軍曹がいたんだ、と彼の父親は何時も喋りはじめた。その軍曹は大抵私服でおれたちの住む社宅にやってきた。腕章をつけた軍服じゃ目立ち過ぎるし、とにかく平林さんと付合があるというだけで、喧嘩の仲裁人にされるんだから、おやじなんかありがた迷惑だとこぼしていたな。……

平林憲兵軍曹には、会津若松から呼寄せた奥さんと二歳になる幼児がおり、確か信行という名前をつけられていた。そしてある日、子供の手を引いた満人の子守女諸共に忽然と行方をくらましたのである。

撫順の夏、日中の猛暑に喘ぐ黄色い馬車道は、雨水槽の日溜りが消えた途端、黒い粘土の壁を影の水塊が這う。満人や朝鮮人の坑夫たちは、それを、鴨緑江の鯨と呼び、別に、飛ぶ橋という異名を付けていた。

飛ぶ橋。それは昭和十八年八月。当時十二歳になったばかりの小松藩吉は子供心にも異様で熾烈な雰囲気のある捜索隊の出動の有様を目撃した。平林憲兵軍曹の指揮下に配属された歩兵の二個分隊を中軸に、炭鉱労務課の手配する十数名の日本人鉱員、「鮮満系坑夫」およそ四十名の一週間余にわたる気違いじみた探索ときき込み。しかし、子守女の行方は杳としてわからず、憲兵隊の苛た



ちに応えるべく、労務課はついに思い余ったあげく、町外れの小屋に住む朝鮮人の夫婦を連行する。

とどのつまり、朝鮮人夫婦は銃殺された、と小松藩吉はいった。そして普段よりも酒の量が増すと、むごたらしい責苦と拷問の場面になり、男は見てきたようにそれを話した。

朝鮮と満州の国境には、そんな怪し気な、何をしているかわからんような朝鮮人や満人がうようよいて、つかまえるようと思えないが、そういうやからを見つけたすには事欠かなかつた。しかもそれらはどんな理由で逮捕されても、滅多に口を割らない。自分がやったともやらないともいわない。だから、考え方によっちゃ憲兵隊や警察にとっては都合よくもあるわけだ。それつらな真犯人にしてしまえば片がつくという面もある。……

それでも、憲兵軍曹の息子が誘拐されたという事件は普通のものではなかった。真犯人をいくらでつち上げたところで、子供が見つかるというわけじゃない。じっと考えてみれば、満人の子守女諸共消えたところに事件の鍵は隠れているんだが、調べてみると子守女には身寄りも親戚もなく、元々炭鉱の雑役婦だったというものだから、炭鉱としちや余計に辛い立場におかれていたわけだ。それで、満人の子守と時々口をきいていたこともあるという、ただそれだけの理由で、さっきいった朝鮮人の夫婦を引張りもしたんだが、首を横に振るばかりでどうしようもなかった。

それで、事件はどうなったかというのと、憲兵軍曹の息子は生不明のままついに発見されなかった。捜索隊は一カ月余りも探し

まわっていたし、平時ならともかく、昭和十八年の戦時だという場合だけに、それ以上事件に人手をさくことはできなかったんだ。間もなく憲兵軍曹は奉天に移され、寝込んでしまった奥さんは内地へ帰って行った……。

小松藩吉の話が一段落すると、母親の房江は決まって窺うような視線を彼に向けた。そしてある日曜日、男の不在が四十日近くも続いていた日の午後、「あの人の話はみんな受売りだよ」といったのだ。

「え、あの人って誰。何の受売り……」彼はきき返した。

「撫順炭鉱の話さ。あれはみんな兄さんの話を自分のものにしてるんだ」

「兄さんという……父ちゃんの兄さんか」

「伯父さんだよ、お前の」房江はいった。「撫順炭鉱のことはみんな兄さんの話さ」

「父ちゃんは撫順炭鉱にいなかったのか」

「撫順炭鉱にはいたさ。満州で生まれたんだからね。でも話はみんな兄さんのものさ。かあちゃんはみんな知ってるんだよ」

「その伯父さんというのは、何してる。いま」

「兄さんは死んだよ。雄別の事故でさ」

「雄別。父ちゃんも雄別炭鉱にいたんじゃないか。何時か雄別の話もきいたことがある」

「お前が生まれる前だよ。かあちゃんたちはみんな雄別にいたんだ」

「伯父さんのこと、はじめてきいた。なんかきいてたような気が